

三陸新報

長い航海の生活大変

鹿折小 5年生 遠洋マグロ船を見学

気仙沼港海事振興会などによる「海の学校」が27日に行われ、気仙沼市立鹿折小学校(浅野亮校長)の児童が遠洋マグロはえ縄漁船を見学。船の秘密を探りながら漁の仕組みなどを学んだ。

地元の鹿折地区が水産業を通して世界とどうつながっているかを学ぼうと、総合的な学習の一環で初めて実施。5年生53人が、魚浜町のこの字岸壁で出漁準備中の第38漁福丸(小松忠漁労長) 福島県いわき市船籍、439トの船内を見学した。

児童は、かつて漁労長を務めた千葉忠也さん(78)ら唐桑海友会所属の遠洋マグロ船0



小松漁労長(奥)の説明を受けながら操舵室を見学

B3人の案内で船内を見学。資機材が並ぶ甲板や船尾をはじめ、釣り上げたマグロを保存する魚倉(ぎょそう)の内部などを見て回った。

千葉さんらは、漁に使う縄の長さが百数十キロにおよぶことや、漁労長の指示で釣り針一本一本にえさを仕掛けて縄を海中に入れることなどを説明。小松漁労長は、1回の操業が約20時間になること

に触れながら「本船の乗組員は日本人6人に対してインドネシア人が18人。日本人の担い手は少ない」などと現状を語った。

松岡寧佳さん(11)は「操舵(そつだ)室などには最新の機器類が装備されていてすごい」と話した。

ど、乗組員の居室などはスペースが限られていて、長い航海で生活を送るのは大変だと思った。マグロが食卓に並ぶまでに、すごい苦労があることを学んだ。感謝の気持ちを忘れずにいたい」と話した。